

マルバ講演会
「社会的排除はなぜ起きるのか？
—包摂に向けて公共施設ができることを考える—」
2020.1.26 神奈川韓国会館7階ホール

(公財) かながわ国際交流財団 野呂田 純一

2020年1月26日(日)、神奈川韓国会館(横浜市神奈川区)にてマルバ実行委員会及び当財団の主催で、講演会「社会的排除はなぜ起きるのか？—包摂に向けて公共施設ができることを考える—」が開催された。講師は社会福祉学の第一人者で『社会的排除—参加の欠如・不確かな帰属』(有斐閣、2008年)、『貧困と社会的排除—福祉社会を蝕むもの』(ミネルヴァ書房、2005年)などの著書を持つ、岩田正美氏(日本女子大学名誉教授)である。

開始から4か年度目を迎えるマルバプロジェクトでは、欧州で展開されてきたアートや美術館によるソーシャルインクルージョン(社会的包摂)を意識しながら、構成メンバーである各美術館学芸員がワークショップ、講演会、意見交換会などの教育普及事業によって、美術館と、社会的に孤立しがちな定住外国人や障がいのある人々や支援団体等との関係を作ってきた。

今回の講演会はもともと、「社会的排除」概念についての理解を十分なものにするため、マルバ実行委員を対象とする研修会として想定していたものであったが、この社会課題に関心のある方々との対話を通して理解を深めるべく、一般向けの講演会として開催した。講演会には社会福祉分野から数多くの参加があり、普段ほとんど接する機会のない美術分野と社会福祉分野の人たち同士の、社会的孤立や社会的包摂についての対話が可能になったことは、企画者として大変ありがたいものとなった。

水沢勉実行委員長(神奈川県立近代美術館長)による開会あいさつ、財団によ



水沢勉実行委員長による開会あいさつ



欧米の公共文化施設による社会的包摂の事例紹介

るマルバプロジェクトの概要説明の後に講演が始められた。講師の岩田正美氏からは大きく5つの項目(①「なぜ社会的排除は注目されたか?」、②「社会的排除概念の理解のポイント」、③「公共性と社会的排除」、④「公共空間と社会的排除」、⑤「情報や文化は誰のもの?」)に分けて話をしていただいた。岩田氏が以前、執筆した論文「社会的包摂と公共施設」(『現代の図書館 Vol.50 No.3』、日本図書館協会、2012年)にも触れつつ、紹介したい。

社会的排除とは「従来の失業、貧困、障害、不登校、虐待等の社会問題を、社会関係の観点から捉え直した概念」であり、これが1980年代の欧州で注目を集



講師 岩田正美氏

めたのは、(1973年の恐慌と変動為替相場制への移行を境に急速に進んだ)先進諸国における「脱工業化」とそれを含んだ「グローバリゼーション」の大きな流れの中に出現した「二極化社会」が背景にあるという。

先進諸国の脱工業化の過程には、製造業を中心に発展した大量生産組織とそれに結びついた安定的な労働体制から、(コンピューター等の情報技術の発展を基礎とした)金融や新しいサービス業での「変動」的な生産・労働組織への再編があり、そこでは非正規雇用や短時間雇用等へと雇用慣行が変化し、若者が長期的に失業するようになった。

フランスでは特に学校卒業後の失業は社会保険制度にカバーされず、公的扶助からも排除されることとなり、それを原因とする若者(移民2世・3世の長期失業者など)の暴動等が数多く発生した。そのため、共和国で「連帯思想」の強い同国では、そうした不利の連鎖に絡む「社会的排除」をなくすことが課題となった。その後、EUの政策にも取り入れられ、「社会的排除」は各国で克服すべき社会問題となり、人々を包摂していくこと(社会的包摂)がゴールとして設定された。



講演内容に対する感想シェア

「公共」とは多くの市民や社会集団の共通利益を言うが、その共通利益の中では対立することがあり、そのため、特定の個人・集団(少数派)が排除されることもある。実際に道路・河川敷・公園等の公共空間では管理者の都合から、ホームレスを定着させないための花壇や動く歩道の設置のように「柔らかな排除」が行われやすい。また、図書館、美術館等の公共施設においても、ベンチを棒状に設計してホームレスが寝ることができないようにするといった「柔らかな排除」がある。

究極的には「情報や文化は誰のものか」という問題に行きつくが、欧米の公共文化施設による社会包摂の事例が参照のために紹介された。例えば、北欧の図書館は人々がただ読書する場ではなく情報交換の場、サロンであることを是認しており、英国のナショナルギャラリーはそのコレクションを英国の財産ではなく世界の財産と考え、どんな人でも享受できるものとして、入場無料にしているとのことである。

大まかには、以上のような内容で約40分ほどの講演がなされた後に、参加者が5~6名のテーブルごとに感想の

共有を話し合うセッションを行った。美術館館長・学芸員などからなるマルバ実行委員は多様な参加者との対話のため、テーブルごとに分かれて座った。

参加した方々の中には講演内容が普段の仕事と直接、関係を持つ方もおり、各テーブルとも非常に熱が籠ったものとなった。参加者アンケートには「美術館・文化施設に職をもつメンバー間の話し合いがあった。各自の経験から「柔らかな」排除に意識せず加担してきたのではないかという気付・反省があったかもしれない」といった意見もあり、公共文化施設の学芸員・職員として当然のものとして行った職務が先の「柔らかな排除」につながっていた可能性も話し合われた。最後に各テーブルで共有された感想がマルバ実行委員により会場全体に紹介された。

今後ともマルバでは地域課題でもありつつ全国の社会課題でもある、定住外国人や障がいのある方々の社会的孤立と排除、それを解決するための手段のひとつである「美術館・アートによる社会包摂」に関する理解を深めるための模索を続けていきたい。



各テーブルの感想の会場全体への紹介

■マルバ(MULPA)とは

Museum UnLearning Program for All/ みんなで“まなびほぐす”美術館—社会を包む教育普及事業—の略称。(公財) かながわ国際交流財団が神奈川県内にある4つの公立美術館(神奈川県立近代美術館・茅ヶ崎市美術館・平塚市美術館・横須賀美術館)等に呼びかけ、定住外国人や障がいのある方々等を含む「すべての地域住民」の美術館へのアクセス向上やインクルーシブな教育普及事業の企画・実践を目的として、2016年度から始まったプラットフォーム型アートプロジェクト。

●特設サイト URL

<http://www.kifj.org/mulpa/>